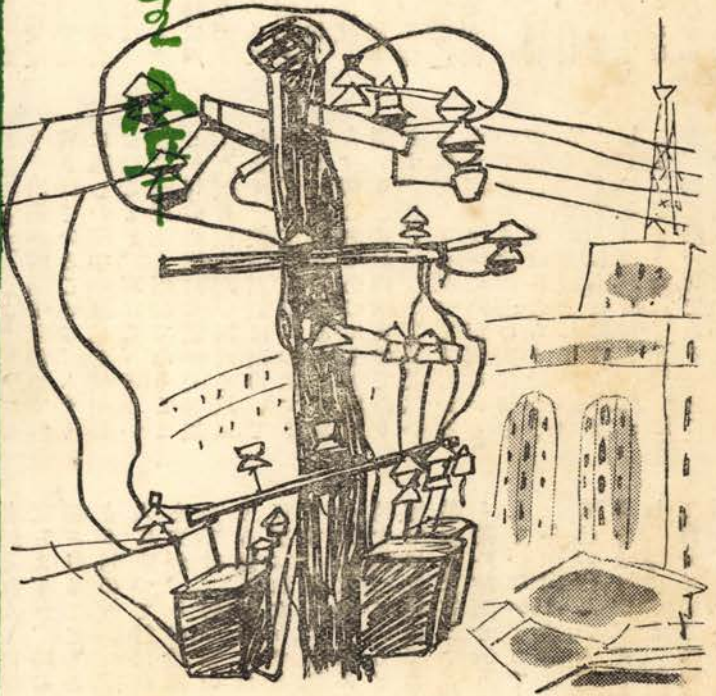


Pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

麻生路郎☆主筆



二月號
No.273

昭和廿二年七月一日第三編郵便物認可
昭和廿五年二月一日發行第五卷第二號

(每月一圓一日發行)

創刊大正十三年・通卷二百七十三号

川柳の雅証



續川柳講座

(23)

麻生路郎

披講に就て

句会で作品を発表する手段を披講と称して居ります。現在大阪の句会で実践している披講の方法は二種類であります。一つは互選披講であり、他は選句者自らがする披講であります。句会の当日、出席者が出席うまでに課する席題の一題は互選とする慣例となつて居ります。では、そうした互選はどうして行かうかと思ひますと、互選課題の横に表してある作品の締切時間がまゐりますと世話係によつて集句されます。そして、その集句を披講の世話人が受取り、壇上から一句々を朗読して作家全員に選句させるのであります。その方法としては朗読された句を聴取して佳吟だと思つた句を、各作家たちが「頂戴ッ」「頂戴ッ」と叫んで、抜句の意思表示をするのであります。この場合、「頂戴ッ」の音が例令一人で

あつてもそれで入選した訳で、他の人たちは黙したまふであります。黙しては居りますが、その中には抜句に賛成している人たちもいるのであります。非常に優秀句の場合には四五人が殆んど同時に、「頂戴ッ」の声をかけます。しかし四人も五人も一時に声をかけようとな句はそうザラにはありません。二三の人たちが声をかければ、入選句として扱ひ、サツサと次の句を朗読いたします。この朗読を指して互選披講と云つて居ります。そして朗読している係り、つまり披講者も「頂戴ッ」と叫んで、抜句することが出来るのであります。

各作家は聴覚によつて選句する訳でありますから、時には、句中の文字が同音であるために、他の意味に解されて句意が徹底しないこととなり、誰も「頂戴ッ」の声をかけない時があります。そんな時披講者だけは、視覚によつて、その句を解することが出来るので誰も頂戴しなくても佳吟と思へば頂戴して聴覚による選句の短を補う訳であります。しかし、同音で誤聴され易い句と思つた時には、披講者は一寸、文字に対して簡単に説明を附けるので、聴覚による誤選と云ふことは殆んどない云つてもいいでせう。川柳が所謂平言俗語で構成されていること、ムヤミに難しい漢字の語彙を使用しないこと、耳にこゝろよい響きを與える短詩であることが句会の進行に能率的な披講互選を生んだ原因だと思はれます。披講互選は出句していません。披講互選に参加することが出来るのでありますから、初心者であつても勿論互選することが出来るのであります。しかし初めのうちは、いゝ句だなと思つてもなかなか「頂戴ッ」の音が出ないものであります。若し変な句を頂戴して笑はれたらと云う心から、つい頂戴をしないのであります。しかし勇敢に頂戴して、その句が抜句されたとしても、類句であつたり、特に拙い句である場合には、句報に発表する時に、句報の整理係が没句にしてしま

うのです。ですから、佳吟だと思へば遠慮せずに頂戴していいのであります。しかし、何人でも自分の作品を頂戴することは出来ないことになつて居ります。この互選披講の外に、選者を指定した兼題及び席題の披講があります。それ等の披講は、選句をした選者がそれ／＼自分で披講台に立ちますが、時には代理で披講されることもあります。つまり句の披講は選者又は世話人によつて行はれる訳であります。その披講の巧拙によつては、句の味いが、實際よりも高く評價されたり、非常に損はれたりするものであります。その点披講者は披講の仕方によつて句の生殺與奪の権を握つて居ると云つても過言ではないのであります。披講者にしても作家にしても案外披講と云うことを重視してないやうであります。

多くの作家の句が次々に披講されている時、他の作家達は、それ等の句の入選を知ると共に、その句境に浸つて、句を鑑賞し得るだけの余裕ある披講をしなければ披講者の責めを充分に果たしたと云ふばならないのであります。多くの作家は單に入選さへすれば能事終れりと云つた態度に見えるのであります。尤も披講者にしても、如何に披講すれば、それ等の句が生きたか云うことから、全く無関心のようであります。それでは折角の佳吟も佳吟としての生彩を放つことが出来ないものであります。披講者は出来るだけ慎重に披講しなければならぬし、各作家は出来るだけ静粛に披講される句を鑑賞しなければならぬのであります。同じ課題の下に作られた他人の句を鑑賞することによつて、表現技巧の上に、詩想の上に教えられる点が多々あることを知ることが出来るからであります。従つて披講者にしましても、單に句を棒読みしただけでは披講とは云えないのであります。そうした披講者は私が嘗て説いた「川柳の音数と其のくぎり方」を熟読して欲しいのであります。

へないのであります。再び云いますが、披露は句の單なる朗読ではないのであります。その句のくぎり方は作家の呼吸を呼吸しなければならぬのであり、同時に披露者に相当の音量と明朗な発音とを要求するものであります。披露者に音量がないか、発音が不明確な場合には披露は單に入選の成績発表に終り、句の鑑賞が全く不能に帰するからであります。特に句のくぎり方に就て留意したいことはどんな句でもすべて五音七音五音で披露することの如何に拙なるものであるかと云うことであります。と云つて、あまりにも芝居がかつた披露やゼスチエアたつぷりの披露も好ましいものではありません。何れにしても句会に於ける披露と云う制度の存続するかぎり今少しく披露の研究がのぞましいのであります。

されるのであります。時には常に披露を担当する人達によつて披露研究会を開くことも必要だと思ひます。次に披露と關聯する問題として各作家は、自己の句が、抜句された時、披露に呼應して直ちに、ハツキリと雅号を名乗ることがのぞましいのであります。そうすることによつて、記録係の誤記をふせぐことも出来るし、一面句会の空氣を緊張させるのに役立つからであります。

曾て山陰の某地の句会に臨んだ時、披露に應じて直ちに、入選作家は自己の雅号の末尾に光榮の二字を附し、尻上りに高声に名乗りをあげたことを未だに記憶して居ります。これなどは記録係にとつてもまことに聴取り易く、やゝ理想に近いものであります。

披露と云うことが作家の作品の発表手段として非常に重視しなければならぬものであることを知ると共に、作家も又それに対応して句の鑑賞に眞剣であることがのぞましいのであります。

川柳もなか／＼むづかしくなつた。昔から俳句よりも至難と承知はしてゐたものの、昨今全國の柳誌上にのつた作品を見て、川柳入門は手易くないと思ふ。次から次へと新進の作家が現れて「いゝ句」を吐かれる。中には一寸直感におく、吾等のみ込めぬ作もあるが、之に對し決してデマ政治家のやうに鵜呑みはせない。現在もつ生活の環境に尖端的共鳴する句は再読して、川柳人ならぬ柳好きの人々え作者の氣持を伝え、其作品を尊重するのである。本誌二七〇号の「川柳塔」から左の三句を抜いて、私の隨想としやう。



作品尊重

—二七〇号の三句—

安川久留美

記一頁に作者の感想が書かれ、夫れを又縮少して一句の短文学となつたもので、他人えシークレットの日記の中からの川柳味を生んだものとする。

大の字にごろりとうちの疊なり

戸田古方
大の字に寝るといふことは余りにいふれた在來の言葉ではあるが、中文字の表現によつて句は生きた、仮りに商用の旅から帰つた人として、車中のきうくつからぬけ我家のいかに自由であるか、此句の内容で、のんびりとその平淡さは些の技巧ない点を頂きたい。「うち」の疊は古くとも味のある生活吟である。

一幕を残して歸る共白髪

水谷竹壯

この句も坐五が月並の句にをいがする。然し若いものに進められた芝居見物も末尾をかざる賑やかな一幕を

見ずに歸る人事風景は、老夫婦らしい。その人物を古い文句で止めたところが説明をさけた整いの句、階級程度もハツキリとしてゐる。
(十二月二日)

異國の話(一)

イタリーのトリノと云う町で十九の娘が男の子を産んだ。彼女の女は元來子宮の發育不完全で、とても子どもを産めなかつたのを有名な婦人外科医マロ博士が執刀して、健全な子宮を移植し、物の美事にお産となつた訳、ところが、の評判を開きつけたイギリスのフランク博士は「産んだとはいかに彼女だが、子宮は他人の物だから彼女の女は赤ん坊の母親ではない單なる養母に過ぎぬ」と云い出した反響は反響をよんで、目下この問題をめぐつて宗教的に法律的にケン／＼の騒ぎである。

最短時間で結ぶ
大阪・名古屋
時間25分
3特急
毎日3往復
座席指定制
特急料金 ¥50
上本町 7.40 12.40 16.40
名古屋 8.05 13.05 17.05
近畿日本鉄道



堺市 中島生々庵

貸したのが結局負けて除夜の鐘
貸し借りもなく湯豆腐で大晦日
新築へ勢一ぱいの初日の出
待つて居たくせにしぶくかくし藝
妻一人旅へ出す日の氣の弱り
北風に俺の肩巾みぢめすぎ
集合時間守り流行らぬ医者にされ

大阪市 武部 香林

草に寝ておもうことなし秋の空
ぜんざいでもう胡魔化せぬ年になり
廁から瓦斯の指図も新世帯
労働は出来ず重役にもなれず
株で当てた人に今日から身をまかせ
太く短かくなどゝ女の酒煙草
持ち寄りの炭に円座の芭蕉庵
十二月今年の握手して別れ

兵庫縣 戸 倉 普 天

別邸が俱樂部となつてダンスとか
本日休診奥ではすきの匂ひがし
泥のついた落穂も拾ふ我であり
煙草好きもう寝るにさへくわへたり

大阪市 浪 玲之介

べとのない罹災の意味を子が知らず
いつも朝喰べない話隣の子

放つといてくれと養虫風に揺れ
考へて見よと上手に叱るなり
オツサンで俺がノーベル賞の齡

奈良縣 上 田 翠 光

ハンチング配偶の好みと言ふタイプ
珠数のつめたさが心に徹る

横濱市 福田 山雨 楼

油絵を今日描き了えて落葉暮れ
アメリカの小包開けて灯に語る
老嬢の勤めにしたいとの手紙
かくてわれ年寄りじみて朝の冷え

スチームが通るトタンに職を辞し

池田市 戸 田 古 方

インテリが誘ふてくれて来る銭屋
出不精の口実になる雨が降り
妊娠をする女と女のあけすけな

布 味 内 藤 草 一 郎

白痴の子あれも酔余の戯作かや
失職の身にも時計を巻いて寝る
脚線美如何と言つた風に組み
ミシン背にスタイルブツク繰りに繰り

やあ君も来たかど出会ふ性病科
品皮へあれ／＼お乳が見えそうな
情なやこう迄塗るに振り向かず

尼崎市 水 谷 鮎 美

迎春に心のカスは残すまい
デパートの海鼠のいろも春なれや

岡山縣 浜田 久 米 雄

かんの立つ話唇曲げている
落ちついて見る十二月面白し
落ちついて語れば恋の人でなし

大牟田市 高 田 抱 逸

月掛けの旅の土産は傷だつた

女の眼少さい慾へ動かない
結成会幹事は靴の世話もする
大阪市 市場 没 食 子

肺浸潤柔道着ともお別れか

妻子ある身と知れにけりザ・エンド

病院へ血を賣る男馳けつける

子は達者勉強せよが口に出来る

うどん党パン党子供二派となる

社も赤字切らなら切れと首たたく

酒呑んで帰れば妻も子も嫌ひ

他処ゆきは質屋の蔵で保管され

賣喰をしてるにでかい市民税

佛壇があいてる今日は誰の日か

名古屋市 吉 田 水 車

金策ヘラチオは新派大徳劇

サンダルの女いきなり脚を組み

のつびきならぬ音はアルミの弁当箱

大阪府 須 崎 豆 秋

ほの／＼元旦になる酒のいろ

お元旦だけはしよう助さんになり

どないしましようか猫が風邪をひき

ストとかや高下駄はいて歩かされ

スナツプ屋いそぐ二人と知つて

会議室落葉終日散りつゞけ

街燈は冬の對話をしているよ

洗濯のぬれ手で蜜柑ひとつ呉れ

長火鉢身分の違ふことを知り

股火鉢神さまなんぞ信じない

病人がりんごのつやをジツとみる

玄関へ下駄を揃えて待つて

樂焼へ君と僕との名が並び

雑音に負けず電着鳴り続け

大阪府 正 本 水 客



大阪市 北川 春 巢

街頭募金風邪引き甲斐のあつた額
借金をして駅前へ出た噂

特價品買うてみかんがただになり
乗りおくれさせた土産と言ふをくれ
手紙來てから出た熱と医者知らず

下関市 櫻川 不 水
辭職して金は生きてるものと知り
貸した金ようとりもせず質に入れ

姫路市 夷 一 笑
十二月思ひ出せない人に逢ひ

岡山縣 大森 風來子
共済会よろよろ勤める身を守り

鳥取市 中島 鉄 洲
ハNSTの一人は空を凝視する
ハNSTの樂屋樂罐で煙が出来

御役所は暮の拂もせず新春
嚴寒に圧され夫婦仲疎し

露出症の挿絵に老母の憤り

自由販賣錢のないのをあからさま

大阪市 橋本 美奈子
姉の死が妹の青春の窓を閉じ

白壁が豊かに見える汽車の窓

定期祭何時の間にやら嫁きおくれ

子鹿物語

廣島縣 弘 津 柳 慶
パパママをにくみ子鹿の死をなげき

日記から検事は痛い所をつき

満員車女の肌のやわらかき

和服着てチューインガムを噛む女

鳥取市 杉 谷 湖 山

よく見れば柘榴に似たるトンボの目

身を墮さふ墮すまいかと寝返りぬ

八代市 佐野 ト 占

古着屋が心安うにやつて來た
日傭の工夫の口ならあると言ふ
意見する友を敬遠してくらし

兵庫縣 小西 無 鬼
大悟徹底らしく説教じみた事も言ひ
なる様になつて出勤の靴磨く

神戸市 大鶴 喜 由
パトロンがあるやに思ふ金使い
おとなへば何か隠した新世帯

京の宿金さえあればいきな雨
犬も老うれば吠えるのが邪魔くさし

新居浜市 在 間 小 棧
引揚ていらい和服の妻を見ず
仮住居冷たいものに裸婦の像

記録文学中の一人は我に似て

鉄瓶の湯に親しみの出来る年

停電はバーネントをあわてさせ
布施市 糸 本 醉 月

日曜は雨々紅葉觀ずに冬

衣料品下落つた時は金詰り
税務署でイヤと言ふ程頭下げ

岡山縣 山 分 淑 郎
信心の母神棚え手が足らず

女生徒の教師に見せる媚をもち

夜の女君の故郷も秋だらう

追放の父に國旗のはためく日

十二月招待をどうことわらう

大阪市 大西 野 介

熱すこしある手に握手別れ來た

愛は愛パンはパンなる別れした

新しいタオルで今朝の顔を拭く

「死」をみつめて光一箱空にした

燃える燃える或日のぼくはネロに似る

東京都 山根 白 星
ゆづられた席に不満の父帰る
新婚の夫婦の好きな赤い屋根

温泉に疲れに來てるよなふたり
うぬばれてゐたが誰かの子を孕み

大阪市 渡 辺 孫 拙
除夜せわし母は一人であとじまい
鏡餅ひゝをうしろにかくしおき

池田市 小田 垣 蝸 牛
ステツプもふみたし駅のアルバイト

奈良縣 飯 降 白 香
学帽に夢多かりしとは昔

吳 市 林 野 甦 光
こうしては居れぬ生活へ野球場

台所子供の無理を寒う聞き
大阪市 竹 田 芦 穂

成田さんのお守つけて市バス往く

ボーナスの晩大阪は良いところ

誘惑誘惑河豚提灯に灯がともり

小紙幣面倒臭く皺になり

救命具落ちて來そうなここにあり

國會で平和を説くと居眠られ
試験制すまじきものは宮づかへ

京都府 間 嶋 青 丹 子
孔雀食つた事が自慢で少し酔ひ

青空へ女も自然の子にかへり

両親は死んだと浮浪兒じよさいなし

阿蘇山にて

白菊の話を開いている旅愁

大阪市 上 田 春 柳

電車賃位でおやち叱られる

儲うからぬ師走にしやくな節電日

冬の銜金詰りと寂しむなあ
クリスマス夢の國へも橋が着き

尼崎市 靜岡 忠八

勤労者組織があつてなめられず
うちわもめさせて資本家嬉しがり
実情を無視した政治ばかりなり
社会党だんだん右へ連れて行き

大阪市 松江 梅里

エロミグロとぼりの降りた旭町
かくし藝残念ながら鳩はつば
集金の来る日競馬に家をあげ

岡山縣 丸山 弓削 平

プラトニク横からさつと攫はれる
汽車の席背中合せは美人らし
焼いてある秋刀魚で食へど外出か
愛の巢へデリリく荷を運び
天光々見るくうちにしほらしく
死にませう女男を打診する
闘病に握りしめられてるすき

岡山縣 直原 七面 山

五十円がボマード付けて逢ひに来る
署長又金の力に動かされ
父さんは恋愛結婚忘れてる
再会は同じガードの下に住み
さすが男よस्ताくく行つちまい

心臓が強過ぎたので首になり
洋裁の私は暇な娘です
看護婦に色氣があつて勤まらず
恋人の頃は隠せた肌の痣
Y談へ席を外した未亡人

三十で惚れた張れたを通り過ぎ
慾情が何うの斯うのど女学生
四十八松竹梅の帯をしめ

亡き父の眼鏡を母は持ち歩き
ビール手に其の妓の嘘をつまにして

宇都市 上林 粗影

男の子すぐに父さんの肩をもつ
女房にあまえない風邪の床の果物
柿たわ真下は遠足の長い列
薪の用意は出来たかと時雨来る

姫路市 狩野 燕子

砂利一つ一つが寄附であり
虎の子の金をすられた大晦日
貰い風呂序でに新聞かりてくる
仲人が社長で嫌といきれず

兵庫縣 石岡 正司

買だめをあざけるやうに値が下り
不精者悉文までも書かせる氣
前を行く人は酔つてゐるいゝ月夜
博士今日和服で郷里の母を訪ひ
事務官の名刺やたらに撒きたがり
收賄の記事直税課にがりきり

大阪市 西森 花村

十二月遺憾ながら返事が来
聞いた様な文句に出合ふラブレター
窓越しの雨は止まないターミナル
泣きながら女反應觀察し

鳥取市 河村 日満子

こがらしに我が家の障子みな動き
花瓶にも佛さんにも菊を挿し
何日の頃からか唄はぬ人となり
十月の四・五日に田の交りやう

兵庫縣 家沢 薺花

反省をして蟋蟀の声に寝る
元兵營の遠望ラッパが聞えそう
子の無いのまで戦争のせいにする

練習の球を見ている子が受けた
大臣の弁を停電フツと消し
土産にもならぬお芋となりけり
冬が来たこのメリヤスも久しいね

滋賀縣 黄瀬 美秋

バス嬢の下駄に踏まれた田舎バス
帰されて洋裁などへ通ひ出し
スクラムを組んでマツチをやつとすり

岡山縣 藤本 満年

生活の打算もしているませた恋
ストイヴへ公僕さまがぬくくど
人前で女房を賞めて平和なり
実力がなくて小股を搦う術
飲まれた時だけ味方のような顔

金沢市 安川 久留美

口ずさむ詩に銀髯のおごそかさ
バラックも幸せ祈る初日の出
初日の出むかしく絵ハガキに

松山市 前田 伍健

全智全能神の使徒にも金詰り
招待え紋付で来る老夫婦
キヤラメルを口の後見舞台え出
老らくの恋何か書きそれが賣れ

大阪市 橋本 綠雨

正月に歳を聞かれて寂しがり
貞操はうばわないよと連れて行く
どの娘もどの娘も若いだけのこど
山茶花は赤し火鉢で居眠りし

清水市 富士野 鞍馬

門松の今年の値段きかされる
日本はダンスホールも注連飾
前客も新聞記者の社長室
自叙傳も書いて選挙に立つつもり



川柳建立

戸田古方

一、發展形式の分類

話のはじめとして發展といふことがどんなことか考えてみたい。發展の反対は退歩である。發展も退歩も變化することである。變化はかわること、動くことである。運動といつてもいいだろう。形式的、内容的、量的、質的などの變化が考えられ、必要條件として時間をともなう。空間は、時間程ではないがこれも重要な條件である。空間が問題にならないのは精神的な變化を考へる場合であり、内容的、質的變化がこれにあたる。變化のもつ運動性はそれそのものでは絶対的である。絶対運動という時には變化の價值、目的、方向を考へない、勿論、天然現象の中にはそれらを考へる必要のないものもある。だが人生に関する限り、殆んどすべての變化は價值、目的、方向をもつ相對運動といわなければならぬ。發展とか退歩とかはこうした

變化である。建立は肯定的發展の最終目的である。そこに至るまでの變化に二通りのものを見る事が出来る。一方的發展に終始する場合もあるし、ジクザク運動をくりかへしつゝ發展する場合もある。これにしたがつて發展に於ける二形式の分類が行はれる。こゝに二人の成功者がいる。成功者といふことには變りないが、成功に至るまでの道程は全く異つてゐる。年少の頃は浮世の苦勞も知らない無邪氣な二人も、物心づけば一人は富家に、他は貧家に人となりつゝあつた。富兒は順調に教育され、貧兒は雇われ、苦學力行した。長ずるに及んで、二人とも、その環境をよく生かして、各その道の達人になろうとしてゐるのである。こゝまで書いて來てその適例としてゲーテとシルレルを思ひ出した。貴族の家に生れ、ワイマル公の宰相として一生を送りながら、「若きヴェルテルの哀しみ」より

「フアウスト」までかき上げたゲーテと道徳と貧苦と戦ひながら親友ゲーテにはげまされつゝ史劇完成のために努力しつゝけたシルレル、いづれを可い、いずれを否とすることは出来ない。長短を吟味し、川柳建立の暗示をたらしめた。

話の進行の便宜上、ゲーテ型をA式、シルレル型をB式と仮称する。

二、A式の分析

A式とかB式とかいう名称はいづれ考察を終つた時に適當なものに置きかへたいと思つてゐる。とにかくA式は天才型、B式は努力型である。先ずA式天才型の發展について考えてみよう。

これが天才型であるといふのは成功的發展を遂げるためには是非天才的要素の介入を必要とするので、もしそれがなければむしろ平凡に墮落するおそれがある。山間の谿流が時間とともに大河になるように、雪原をころがる雪塊が雪だるまになるように、赤ん坊が嬰兒、童兒、少、青、壯、老と成長してゆくように、又娘が妻となり、母となるような發展がこの方式の母胎である。だが順調に酔えば人間の發展より、動物的發展とえらぶところのないものになつてしまふ。理想をもち、向上を思ふ時、当然天才の飛躍が期待されなければならない。

飛躍は如何にしてもたらされるべきか、飛躍の外形は突然である。がその突然が現れるためには、それに値するだけの準備期間を必要とする。先ず強力な指導者の存在である。強力な漬物石的存在が必要である。この世界に於てはむしろ婦納的な人間の自由な活動は封ぜられ、強力專制が最初の要衝を握つてゐる。天才的飛躍をなし得ない一般の凡俗はそれに威圧されて、可もなく不可もなく、たゞ一生をたゞのん／＼とすごしてしまふのである。

幼童又は少年は教育のために一定の枠の中にこじこめられる。指導者はその中から天才の萌芽を見出し、天才をそこからみちびき出さんとしてゐる。それは嚴格な、しかし親切な取扱ひを以て行はなければならない。鞭と激励と應援で彼は次第に天才を發揮してゆく。そして論理的な経路を自覺することなしに成功的發展をどげるのである。彼は修練期に於てきびしき練習を課せられ、何のためにこんなことをさせられてゐるかもほと

んどわからないうちに指導者のスケジュール通りに成功へどひつぱりこまれてしまふのである。指導者の胸のうちに天才が出来上つてしまふ。彼は他人にみとめられた天才のうちの一つの傳統を身につけてしまふのであつて、そこまで來て、彼ははじめてその身についた技を傳統の殻の中で窺息するか、傳統を破つて新しい未來をこゝに自らの力によつて展開するか、こゝに彼の飛躍が姿をみせるのである。彼はもう充分なエキスパートであるからクレンなく堂々と新らしい自分の世界を打樹て、行くのである。この方式はさきにもいつた

寒中御見舞

藤村雅光

大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

胃酸過多

胃痛・胃潰瘍に

ホルモザン錠



大坂・武田薬品工業株式会社

45錠入

丁度子供が組木遊びをするようにそれを組合せて正しい解答に達する方法をかげ指導したものである。関東大震災の年として、関西に難をさけて京都に開講せられた機会に私も親しく講義をきくことが出来たが全くこの考へ方のおかげでその強要された水準へおしこまれたものである。これがB式なのである。考へ方では聖までは指導してないが、聖に近ずき得る所まで相当の人数をつれて行くことが出来たのである。

四、日本人の發展形式

日本人の文化活動に於ける
 成功的發展がありとすればA
 式B式いづれと考へるべきだ
 ろうか、東洋人である日本人
 はやはり東洋的發展の仕方を
 して來たのである。

東洋的發展は東洋のもつ環境に起因する。「樂は苦の種、苦は樂の種」とゆうが、この場合論は東洋の文化を物語る場合に於て正しい。土地が廣く、豊かな東洋では早く文化がひらけた。メソポタミヤ、インド、中國それからエジプトも西洋ではなかつた。これら文化の發生地はいづれも、世界最初の農業の中心地であつた。農業の條件としては熱と光とをもつ太陽、水、それから土である。土に肥料をほどこして人爲的に能率を上げるといふことはすつと後のことで、人力の介入を許したの

は水の問題にすぎなかつた。即ち治水のことである。治水には強力な政治力を要し、指導者としての王ならびにその配下の官僚の存在を過大視する必要があり、そのために東洋史は王を中心とする官僚の歴史となつてしまつたのである。強力な中央集権、あるいは集権的封建制度が行われ、事大思想や官尊民卑などの非民主的な風習が東洋にのこり、昔の樂園はどりのこされた今日の後進國となりおわつた。日本もその例にもれていない。ことに日本の自然はバラエティに富み、春夏秋冬四季のうつりかわり、その上絶え間なき天災の連続、自然に対して斗争するといふように、自然を敬畏し、自然に順應しようとした。これ又一種の事大思想といへるのである。日本文化は自然とだけこむことによつて完成されるのである。分折に非ずして綜合、複雑にあらずして簡潔がその特長となり綜合と簡潔の二者は又同存しているのである。例えば絵画に於ても人物画も風景画も、それそのもので完成しているのではなく人物が風景に又風景は人物にだけこんでいる。建築も屋内と庭園とさらにそれをとりまく風景とさとの調和なしには成立たない。竜安寺の石庭、宇治の鳳凰堂はその好適例である。不完全を精神で補うと称し、不完全

の完全を叫ぶのである。画かれたる画を、語られざる言葉
を聞くというのが日本藝術である。鑑賞者の協力を要求している。十七音字詩の省略の要点もこれに通ずる。しかし東洋独特の藝術の様式といふものが東洋だけにじこめられてかえりみられないかといえばそうでなく、全く質を異にする西洋藝術にも影響をあたえ、それは好奇心からだけではなく、もつと本質的なものにもなつてゐる。リンゴは赤いもの、山は紫に、木は緑とさめることに疑をもつていたセザンヌは、北斎の赤富士に驚愕した。彼は瞬間の眞理をそのすぐれた散智によつてとらえることに成功し印象派を創始した。現今の映画藝術に至つてはことにその技法として東洋的なものを強引に吸収してゐることを見受ける。二重鏡、鳥瞰、接写、時間的進行、省略、移動等の映画手法は古く飛鳥の玉虫厨子にはじまり、平安、鎌倉の絵巻物、さらに江戸時代の浮世絵まで数多く見られるところである。日本式展開は童より聖に直結して、凡をオミットしてゐるように見える。聖は高次の綜合であり、童は低次の原の綜合である。ここに漫画映画に於てはさきの諸手法は縦横に用ひられてゐる。こういへば日本の藝術様式は全くA式なのである。だが過去がそ

うだからといって、今後も A 式だけを考える必要はない。B 式について大に考慮を要することは勿論である。

五、川柳の發展形式

川柳の發展形式はAかBか。結論はどちらからともながめられるのである。そこでA式とB式にわけて各について考えてみることにする。

(一) 川柳に於けるA式
變らないという見方をすれば昔から今まで少しも變つていないのが人生である。喜怒哀樂は外形の如何にかゝわらずたえざる慾望の下に流轉輪廻をくりかえしているにすぎない。川柳は人生詩である以上その千遍一律の人事を取扱ひその中から詩の中の詩を飛び出そうとすれば、天才的飛躍を考へるより外に方法はない。か様な飛躍の最も卑近にあらわれる場合は非常に限られた時間で作品を完成發表する必要がある時などにあらわれる。充分な推蔽のいとももない時、自然に巧まざる想や表現にぶつかる。これはしかし突然に起るのでなく、相当に長い修練の結果である。ほとんど無意識の修練であることが多くかもしれないが、とにかく理屈を超越した魔力を發揮して、満足すべき結果に到達するのかもしれない。

時事吟に於てもこのことはいえよう。細部に於ては異なりとしても、根は慾望に端を發

する人生の出来事である。人間愛も又普遍的なものである。たゞわけもなく作れば平々凡々に終るにすぎない、それが秀句となるためには教養による洞察力と、その結果現れる飛躍を期待しないわけにはゆかない。

童が幼となり、青となり、壯と成長するのは平凡な新陳代謝である。川柳のA式も又こうした平凡な新陳代謝の間から飛び魚の様に跳び上る極くわずかなものを期待するのである。



血圧降下に アーグレミン

血管アウトルホモンとアミン塩類

錠剤
注射

山之内製薬

（ロ）川柳に於けるB式
個人の川柳作句の場合と川柳の歴史の場合と両方面に於てB式の展開を考えることが出来る。作家が作句しつゝ藝術を意識するのは余程作句修

（ハ）川柳に於けるA式
個人の川柳作句の場合と川柳の歴史の場合と両方面に於てA式の展開を考えることが出来る。作家が作句しつゝ藝術を意識するのは余程作句修

理想などおまへんせうオムツ乾し 兵庫縣夏 六
空つ風越年資金のビラを裂き 同 同
カストリへ社長であつた人が来る 同 同
シツケ糸どうバスえ乗りおれ 廣島縣愛 鳩
ゆう通のきかぬ奴だが金は貯め 同 同
金づまりおかしい程にサービスし 同 同
正月の紋付猪口へためらわす 長野縣柳 兒
年玉の賀狀に友達甲斐を知り 同 同
電着が隣りの店子から響き 同 同
復職へ粉骨碎身誓はされ 大阪市文 雄
伸びよ子よ喧嘩は勝つて来ておれ 同 同
氣がついて見ればサクラが笑つた 金沢市陽 々
尻もちを付いて大根一つ抜き 同 同
母の字のたどたどしさも胸をつき 尼崎市ちか子
縫ひながら蠅も叩いて好い天氣 同 同
文化國家ロソク代が要るのなり 具塚市幸 司
子が出来りや麻雀止めると言つたに 同 同
催促はせずに詰つた話する 今治市醉 歩
実家だと言ふ強味あり妻の声 同 同
誠のこと議論のあとで氣にかゝり 今治市松 花
本職に出會つて照れるアルバイト 同 同
赤い羽根其の後は募金除けになり 東京都万 年
母一人子一人弁当あたにかい 同 同
赤くとも帰つてほしい夫なれば 今治市映 月
悪口を言つて自分を小さくする 同 同
初ごたつ世の幸福を味はひぬ 滋賀縣和 友
福壽草窓へ静かな年があけ 同 同
偽善者と或夜は思ふ日記帳 今治市船 通
稻をこぐ昔に師走が身にこたえ 同 同
色氣衰へず病院の粥に生き 岡山縣富 至
押し一手何日か淋しい日に出會ひ 同 同
シベリヤはつらから日本に冬が来た 奈良縣雀踊子
大根を洗ふ手元へたそがれる 同 同
嚙んで／＼ガムの様に捨てられた 岡山縣鉄 兒
入院の費用会社は金詰り 同 同

停電も嬉し二人の空なれば 石川縣醉 羊
たゞそばに居るだけ嬉しある日記 同 同
押迫りましたと山草賣りに来る 岡山縣娛句樂
六男死二月十二日
末弟へ長男だけの御焼香 同 同
のめくと腰低うなりこの八百屋 大阪市若 菜
物賣りの多くて晝の戸を閉す 同 同
招かれてダンスへ堅く乳を締め 岡山縣秀 鶴
下女の足袋吉田のそれと姉妹品 同 同
買う事にしたのを横から奪はれる 岡山縣茶 々
不斷着にうつらぬ髪に結び上り 同 同
新築へ子供希望も容れてやり 岡山縣一 路
學資金母は商賣かくして居 同 同
愛情もなく唇を盗もうとする 石川縣夏 波
妻捨てた悩みを父母に知らすまい 同 同
かるた會又古きすが痛み出し 兵庫縣無 聖
參觀日母を見てから手をあげる 同 同
彼女もう三十三の皮膚の色 香川縣迷觀子
集團心理デパートまではたゞ歩き 同 同
市民税喧嘩までして拂わされ 布施市柏 葉
旅に寐てふとんの下を大事がり 同 同
配給の列に北風強すぎる 富山縣壽 郎
入 院
面會に妻といふのを言ひそびれ 同 同
轉宅は勝手の違ふ坐りやう 池田市木 声
薪を割る身に昇越しの謠声 同 同
着かざつた人の仕合せ子を持たず 滋賀縣觀 月
マスクして孤独といふを愛してる 同 同
片思ひよつほどたつてからわかり 滋賀縣文 子
背なの子をゆすり上げて話題かえ 同 同
大時計だけがゆつたり大晦日 大阪市關 骨
断ち切つた愛え花粉が散つてくる 同 同
ラジオにてお声は存じてゐます 布 哇東田棲
元旦の決意禁酒を延期する 同 同
就職は出来たが筆算恥かしく 兵庫縣指 月

れでは詩としての値打も、十
七音字にわざわざ限ぎつた意
味もなくなる。修練に修練が
必要になる。多読、多考、多
作というようなことも必要で
あらう。想をねり、技をみが
く、その後に生命ある句が生
れるというのである。容易な
業ではない。
未來川柳とは如何なる構想
のものであるうか。
針金ヘゲサリと名札さゝ
れたり 豆秋
又豆秋氏の句を引合いに出し
たが、この句に關し、これと
同想のものに
つるはしがグツと処女地
へつつ立つた。 古方
もえうつる軸木何をか無
常觀 古方
この私の二句と豆秋氏のそれ
とくらべるとはるかに見おと
りがする。それはあまりにも
説明的だからである。「無常
觀」というようなことばをつ
かつたりすることは下の下で
ある。「つるはし」の句にし
てもつるはしの運動のダイナ
ミックを感じさすだけのこと
であつて、いやにしかつめら
しくかまえたにすぎず、わざ
とらしい。「針金」の句の日
常の何のへんてつもなきさう
なことがらの中にむしろユー
モアと愛をもつて、軽いおど
ろきさへ感じてゐるのには全
く頭が下る、表現は軽いが、
内容は重い。
骨たてたまま二次會へつ
いてゆき 豆秋
と彼の作風は人間悲劇であ
る。悲劇ならざる悲劇であ
る。人間をあくまで掘りさげ
て人間の本性にふれる構想、
川柳によつて人格の淘汰をし
つくした人にしてはじめて生
むことの出来る藝術である。
そこから未來川柳は出発せ
ねばならぬ。
社会批判、人生批判これは
川柳に課せられた最高使命で
あり、個人を、社会を改造し
つくし、陶冶しつくす。それ
には愛の藝術の温さがなければ
ならず、かゝる藝術が百
万、千万、一億、十億と普及
された時、未來川柳の展開は
はじめて呼吸をつぐことが許
されるであらう。
柳多留はじめ古川柳の徹底
的な研究より来る、川柳の面
目のよつて来るものを先ずた

傷夷軍人樂園を見て

敗戦の歌曲が泌みる義手義足 大阪市五郎
旗色はまず算盤にきいてみる 今治市青雨
鮑提げて来たので税務署かと思ひ 大阪市克己
市営住宅建つのは建つが誰の家 滋賀縣季贊
角矯めて矯めて勤続四十年 大阪市六電子
二十五年対日講和の陽が昇り 岡山縣松
今年こそ汗を山積するつもり 下関市穂波
國訛りとたんに出して元氣づき 滋賀縣綱笑
興奮を打ち消すやうな夜の風 滋賀縣幸子



課題吟

夜汽車

北川春集選

お向いもぐつすり寝る夜の汽車 好 郎
寝返れば向い寝返る夜の汽車 雀 子
お隣りにリンゴ貰つた夜の汽車 同
隣席と夜汽車並に通り抜け 七 歩
水田開夜汽車並に通り抜け 一 風
夜汽車の灯暖かそうに通り過ぎ 同
禁制の土産夜汽車で帰らせる 同
夜汽車の強みホケッタンにサンより 喜 由
明けかける夜汽車の顔が恥しい 嘴 六
スキー靴雪ひとりに夜汽車明け 正 水
出戻りはきつ夜汽車で帰つて来 永 客
護送する犯人へたはこやる夜汽車 翻 骨
夜の汽車手錠の方は寝たらしい 翠 柳
被害者の外は又寝る夜行汽車 弓 削
警察の者だ夜行汽車皆起こし 斗 四
夜行車へ肉休もの一冊買ひ 杜 翁
居眠りをおんを様に揺る夜行汽車 芦 的
駅の名も呼ばぬ夜行汽車さつて来 旅 風
ひそ／＼と話す夜行汽車に寝つかれ 夢 生
夜の汽車話題は聞のことばかり

更けてゆく夜汽車の客の無表情 芝 路
酒あつて夜行列車も亦樂し 幸 司
談論風夜行汽車朝まで起きている 帆 虹
お土産のみかん夜行汽車で「へ食」 斗 四
電報に夜行汽車冷い風を入れ 斗 四
電報を打つて夜行汽車へ落付けし 吐 翁
立賣りに夜行汽車を締め締めて 茶 佛
しよんばり左遷夜行汽車の窓より 美 秋
喰い詰めた夜行汽車ネオンへ遠まかり 孤 舟
出張は夜行汽車の日のかきみ 柏 葉
歳の暮夜行汽車の金の集め 東 夢
夜行車から夜行汽車の旅の儲け 迷 子
出張の夜行汽車で旅程繰上げる 暁 明
往復を夜行汽車で明かす金詰り 一 郎
宿賃は子のお土産にして夜行汽車 白 子
支線から帰る夜行汽車は来を持ち 弓 削
夜行車が入つた駅の広いこと 醉 平
オーバーの橋立て夜の汽車を降り 白 子
息子待つ夜行汽車へく風邪引く 白 子
夜行車に泣き止まぬ子を持て余し 白 子
夜行で寄りましてん寝てまらん 白 子
若き日の希望夜行汽車で一人立ち 陽 子
花束は貰つたまゝの夜行汽車の灯 同 美
マドロスをくち夜行汽車の赤い羽根

誘惑も時と場合でついて行き 滋賀縣喜久江
診察がすみのびきつて輪をふかし 滋賀縣夢生
固くなり聞かれた言葉復唱し 滋賀縣和子
親心子等は知らずに年の暮 滋賀縣綾子
商標がものいふ時期となつて来 滋賀縣郁夫
宴会の時に失敗ふちまけて 滋賀縣郁夫
くれてゆく柿は次第に背の高し 岡山縣朗笑
年頭の挨拶父もかしこまり 大阪市周太郎
どの店も覚悟が出来て年の暮 米子市美笑

しめねばならないであろう
ニセモノや、ナマケモノの一
掃を先ず私自らのうちよりは
じめたい。そこにはじめて聖
の光をあはぐことが出来る
のではないかと思ふ。B式の
修練に加うるにA式の飛躍。
私は川柳の道の遠いことを嘆
かない。

住・酔いざれもあつて夜汽車の派手な 敬二
卒業の顔見せに去ぬ夜の汽車 喜 由
孫の顔見せに去ぬ夜の汽車 不 二
交代で荷物の番をする夜行汽車 苑 女
油断なく寝静まつて夜の汽車 幸 司
名優の素顔夜行汽車にリンゴむく 鮎 美
処女袂別夜行汽車は熱海まで行き 修 佛
女連れ夜行汽車へ食べものを持ち 茶 佛
人・帳場まだ夜行汽車の客を待ち 正 司
地・東京大阪夜行汽車をつかう儲けよう 日 調
天・夜行車から熱海電宮ほごに見え 春 集
軸・一時間講演をしに夜行汽車で来

課題吟に就て

課題吟の応募者が非常に殖えて来たこ
とは担当選考者も張合いがあると思う。
本欄の応募者は御覧の如く初心者ばかり
ではない。上年も二十年も作句を続けて
いられる作家もある。で勢い激選にな
り、金没の人かなり多数にあるが、金
没にめげずに応募をつづけていた。だ
い。没になるか入選するかは、その時の
課題にも因るのであるから一度や二度没
なつたからと云つて失望してはいけな
い。雑吟と違つて同じ題で作句するので
あるから、たとえ自分の句が没になつて
も他の入選した人の句と比較研究するこ
とが出来るので、課題吟に応募する意義
は充分に存在するのである。(編輯局)

社の黒板

最後にA・B両式の名称だ
が、まだ適當なことはに行き
あたらない。A式に天才型、
B式に努力型とすでにいいつ
くした用語をあてることで許
していただきたい。
一九四九・一〇・二一

▼お年玉の年賀はがきを沢山いた
だいたが、発表の結果はお年玉も
金詰りなの、六等が五枚三枚買
つた。百万円銀を二枚や三枚買
つても当らぬのも無理のない話だ
と思つた。

教育楽器はヤマハ

日本楽器

南區北斎橋筋二丁目ノ一
電話 南 3413 番





四世 眠亭 賤丸 (下)

富士野 鞍馬

川柳宗家を継ぐ者へ傳へられたものに「錦木の廻文」といふ「錦木」とさして谷のつかのまのかつ野にたてし里とさきしに「の三十一文字の廻文で、初代川柳の自筆と傳へられる短冊と、初代使用の「無名庵の印」と木枯しの句を賛した「初代の画像」との三品があつた。ところが四世の時に画像は焼失したので、天保三年に長谷川等雪といふ絵師に再製されて、その画像の上に初代の句「木枯し」の句の外に四世の句「行水やおもかけ移す夏柳」と文日堂の句「写絵や幾秋経ても其姿」賛句を認めて五世以降へ継護されたのであつたが、九世の時(明治二十九年)九世襲名ゴテゴテの中を山形縣の田舎へかくれてしまつた。それを昭和二十四年五月に前田雀郎、大谷五花村兩氏が実見して來られた。その画像を又七世の廣島風世坊が雪莽に縮写したものが別に傳へられてゐる。

再製画像が出来た天保三年

川柳風の前句を、はじめから一句立に作りそれに「俳風狂句」と独立名称をつけたことは、四世川柳の見識でもあつた。そしてその年十一月十二日に深川永代寺で、後の五世である側の主催で、成田不動明王奉納狂句大会といふ素晴らしい会が催され、集句三万といふ盛大さで、その入選四千三十句を、百二十二編から百二十七編まで六冊に収録してある。百二十二編には前述の肖像に出づといふとこへ竹の子

といふ四世の句があり、それに似が續いて「嗚呼盛んなる哉、こたび入章三万にあまれることいまだかゝるためしをきかず。されば先生口すさみの竹の子はこの道の榮えにさかえ、しげりにしげらんれざしとよるこぼしきのまゝ、柳枝集中初代故叟の画像にならひ今四代川翁の面かけを写す千代をへん色若竹の姿かな 催主個

し。さればにや日を追い目を越へてこの道の繁榮いふも更なり、しかしてこたび大会の小冊子に跋を乞ひ需らる。敢ていなむべきにもあらず、たゞこの柳子の俳徳をそのまゝにつたなき筆にかひつけはる而已。干時天保三年壬辰仲冬 八十五歳文日堂磯川誌」と、こゝにはじめて文日堂が賤丸に川柳風を教えたことを明かにして、四世をほめてゐる。

と述べ、既に五世となる兆を示してゐる。百二十七編には「柳四代目なる柳宗は、そのかみ賤丸なりし時、いささか此道の快を曳しに、もとより一を聞て万を知れるの才いたくまじく、ただちに古代川柳の滑稽をさとし、既に今斯くの如し。しかもその高名も國までも聞え、金ごに句の集る事山の如

郎どハツキリ版元が變つてゐる。円満に版權を譲つたのかどうか、又菅子はなくなつたのか不明であるが、永年の花屋運堂から奎文閣へ版權が移つたことには何か事情があるように思はれるのである。天保四年には遠州秋葉山奉納俳風狂句合を浜松連で盛大に催し、翌五年十一月十一日には、信州松本安樂寺の觀世音奉願に前記の「降る雪に」の句を詠んでゐる。天保五年の「川柳百人一首」の巻頭に、狂句元祖四世川柳として

の句に堂々たる風姿の、國直筆の画像があるが、これは國直の前の肖像と羽織の紋がちがつてゐるのは替紋であろうと見られる。これから三年後の天保八年に六十歳で、十四年の川柳宗家を勇退して、五世を水谷金藏鯉齋側に譲つた。それには健康の都合もあつたらしく、七年後弘化元年二月五日に六十七歳で

れ海

香のあるを思出にして續

の辞世を残して終命した。芝白金最上寺に葬られてゐる。



秋春筆雜

初湯半ゆでたこ

(初春放送余話)

前田 伍 健

一九五〇年一月一日午前六時半からの放送ニタ見の浦、阿蘇山等々の実況元且風景の中に伊予の道後温泉のあつた事をおき、のお方御座います。あの温泉実況放送に私も一ト役買つた楽屋話を致します。

テストの關係もあり午前四時に家を出て約半里ある道後まで、テクリる氣で折からの雨の中を家を出ました。

猶の子、犬の子一匹も通らぬ市中……松山城が雨雲の中に投光器に照らされて、真白い竜宮のように浮いて居ました。テク／＼ピチヤ／＼御宝町まで来ますと、四時半の出庫市内電車の音が遙かに聞えて来ました。ヤレ有難いと待たせて、初乗り、「アツ伍健先生が初乗りしておくれた有難い」と車掌君の顔見知り、たつた私一人の乗客で、道後駅へ、温泉場へ、横手口から、はいると、まだ従業員達に寝て居たが、慌て、飛び起きる間もなく温泉所長其他、松山中央放送局の技術員諸君が見

え、二階から入口え、雲の湯の中、コードがひかれる、雨の中、遠く近く初湯の音が聞え、町はまだ寝ているらしい、それでもぼつ／＼早湯の浴客が見え出した。大時計は六時近くに成つて居る、私の役は湯の中で地方丸出しの言葉で、元朝日新聞文藝部長の越智水草さん愛狸家と有名な伊予鉄道会社庶務課長富田狸通さんを対面の浴中放談であります。テストが始まる、三人は丸裸で湯の中へ（お湯へ入るのだから丸裸はモチロンですが）入る、湧出する湯の音をマイクに入れるが、小さく低く、そこで、桶を湧出口え持つて行つて、桶へ受け溢れさせる、二重の落下音でヤツト音らしく成る、オーケーと、技術員が手を舉げて合図する、温泉独特の時太鼓を打つ、続けて、いや間を置いて、舞台うらの苦心一と通り成らず、ヤツト準備が出来上り、時計を技術員が見る、林アナウンサー！君が緊張する、私は湯桶を湧出口え持つて行つて、効果係の手助けもやる、三十分も、湯の中に居るので、少々ボウとして来た、飛び出して外の寒い空気にふれて調節する、技術員が、早く／＼と官腔学校式に手で叱り合図する、一分

二分三分……新湯のスキト状況が入つて来る、頭がガン／＼する技術員氏も、額口から汗かにじんで居る。

舞台うらの苦心……雑誌の発行編集も同じく舞台うらはツライ、この放送を元日気分で寝たで、たばこでも喫い乍ら聞き、エ、のワル半のと云うお方に見せたい位である、まあ、まあ世の中はそうしたもの、批評をする批評家は、何人でも字句或は口頭で、適宜に片付けるが、世の中はさてむつかしいものであります。

こんな事を思つて居るうちに時間 came。技術員が手を挙げた、開始である。マイクが湯の湧出口え伸びて来る。桶係兼話係の私は緊張した、調子はよいらしい、係員の顔が、眼が、それを私に傳える。マイクが私の前へ来た「あーやつぱり初湯気分はエーナも」から始まつて、越智さんの旅客、富田さんの土地の人と、子規、瀨石の話も入れて、マイクはアチラコチラと移轉する……ヤツト済んだ、僅かな時間であるが、それ迄の準備と実行は全くヤレ／＼と腰を叩きたくなる程でした。

それから階上へ、唐崎局長、稲田部長、大原係長、林アナ、技術員等々々温泉所長河野氏外と卓を囲んでの座談会が始まる、有馬と道後の歴史、比較から商賣から話の種は多い、次から次へ懐古、希望、企劃、など正午近く迄続いた。この關係で私は高松の二日にあつた川柳大会へも欠席したようなわけ、道後温泉初湯実況放送に半ゆでタコに成つた私の話は、これでおしまいであります。

私は斯う考える

丸山 司 削 平

詩とは情緒と韻律をもつ言語で人間の心を具体的に藝術的に表現することである。情緒は感情である、最も純粋な詩は抒情詩である。

川柳の一つ／＼は知的な批判が多くて高度な詩は少い、然し私は総て物を大きく見渡したい、と同時に發展する動機として見、解致し度い。川柳は詩型を探つてゐる、そして例へば散文化的な内容が多くとも川柳全体の素養は詩としての香りを放つてゐることを感受せずにはゐられない。何故にそうなのだろうか、それは川柳には批判のみの句もあれば心情を技巧的に客観的に表現する場合もあり、或は又純然たる詩態を豊かな想像力によつて情熱的に表現してゐるものもあつて、川柳は一つの複合体であり一括して人生詩と称されてゐるのではなからうか。

言語が出来てから文法が出来、物の理が進んで定義が與えられるさればと言つて、文法や定義に何もかもがさつちりと当嵌まるものでもなく又將來不変のものでもない。それは一つの集約であり次の發展の基礎として利用するものであろう。政治、経済、社会、文学は皆有機体であつてその中に生命を持ち成長し發展する。無機物の如く分解してその組成を知れば足るものではない。ならば川柳の詩論、非詩論や川柳の定義も次の新しい川柳への移行發展の土台であり手段であらねばならぬ。変化の時間とは変化のことである。変化のない時間と云ふものはあり得ない。変化はより新しくより良きものへの進歩向上でなければならぬ。川柳が高度の詩でないとしても古川柳の模範に終始してはならない古川柳製踏で人々は満足はしてゐない。

寒中御見舞

(柳交歓のページ)

川柳雑誌社支伊部

古川 魔花麗
藤井 友郎
内藤 草一郎
三輪 晩翠
築山 快夢起
村田 流水
小田 沙兆
市岡 曉舟

尼崎市湖江西ノ口一

川柳雑誌社出雲支部

出雲市 高松 緑之助

大勢なるものゝ事實を何人もどう
することも出来ないものである。六
勢なるものには必ず新しい一つの
眞実が含まれ創られる。大きな変
化を遂げてゐる時代に限り大衆は
客観的に賢明である。

それは何故に大衆は川柳に詩
を要求するか、それは川柳が詩型
を採つて居り詩情を盛る根本的な
詩の基盤に立つてゐるからである
。川柳が低俗だからそれから脱
出しようと思ふ様な單純な理由よ
りもつと根底的な理由がなければ
ならぬ。川柳は批判性が強くとも
決して新聞記事の縮小ではない新
聞記事の縮小なら川柳は中途に
於て必ずや小面倒な詩型を放棄し
たであらう。詩でないものなら
表現効果を得る爲に一層の詩
的表現の努力を必要としない筈
である。

もう一つの理由は川柳は他の文
學と同様複雑性と個性を要求さ
れる。近代人の複雑な思想、感
心、心理が個性に結びつければ
柳が詩型を持つてゐる限りより高
い詩的なものへ進まざるを得ない
のは当然の運命であらう。

柳樽戦後版 (二)

吉田水車

母は子のためにかくして一つ
ぬき
今も昔も変りはないがかなしむべ
きは竹の子と言ふ名にかはつた。
氣がへると小童い帳をやめに
する
古い出納帳では数字の桁数が足ら
ぬほどに我が家の家計もばう張し
た。
是ればかり着て居やるとの里
の女
(五)

着るつもりではないがやむを得ぬ
仕義ではあるが、きた切りででも
まだあるのがましと言ふもの。
かんざしをはかりにかけけるし
ぎとなり
怪しげな入れ歯の金迄そつとグラ
ム計りにたのむ街の風景はあとを
絶たない。

風を神せなかながすがす奈なり
(二)
なやましくお尻をふり立てふり立
てせなかながすがすような格好の何
とかダンス。
一村をみるにして立つ旅役者
(二)

田の草とりに汗みぎろの親達を尻
目に向うの土堤を行くニユルツ
クにハイヒール娘の口ささぶ歌は
そも何か何々レビエウ團の残して
行つた齒の浮くようなあのメロデ
イ。

追はぎに逢うたもしるす旅日
記
列車に警乗警官、鉄道公安官迄乗
る世の中は昔を今に返へすと言
もおろかである。
どうせうの相談を聞く矢大臣
(三)

ネオンの街をひやかしの相談なら
ばまだまだ、ごうか一家心中
のようになかなしい物語りの主でな
い事を祈り度い。
異國の話 (二)

三度目の離婚で、しかも相手は同
じ夫のスローアン氏だつたから、
列事もビツクリ、スローアン夫人
は泰然として云うのに「こぼら
したら、またスローアンと結婚す
るかも知れないわ」と。

社の黒板

「川柳雑誌」は川柳界の柳誌で
あて、同人雑誌ではない。徒らに
「同人雑誌」に縛られないで、自
分の関係する「同人雑誌」と本
誌を併発することによって野野を廣
くしていただきたい。▼句会講師
の件、官廳、会社、商店の文化部
川柳会の新設等の御相談には社宛
に通信又は左記へお越し下さい
(日曜) 日曜十三日をのぞく午後
一時から五時まで
大阪市南区難波新地四番丁
北極星三階
川柳雑誌社難波連絡所
電話南 二二四番
二二五番

動靜

▼本社新春句会は正月七日午後五
時三十分から大室文化会館で開
盛会を極めた。▼川柳大阪南支
會は一月廿一日午後六時から何倍
王子神社で開演。▼大阪通信病
柳會は一月廿一日午後二時から講
堂で開演。▼南海電鉄川柳會
は一月十九日午後四時半から同社
で開演。▼南区医師會句会は一
月廿四日午後七時から幸田病院で開
演。▼何れも路郎主幹出席。▼川
柳支部新年句会は一月二日開演。
▼川柳貴生川支部創立句会は一
月三日午後七時から幸田病院で開
演。▼秋、水車、鮎美、里十九
春集、秋、水車、鮎美、里十九
正司の諸氏が出席された。▼川
柳支部は一月七日初句会開演。▼
貴生川支部(滋賀縣)を一月か
ら新設した。支部幹事は黄瀬美秋
氏。▼布哇タイムス社が新年文
藝に川柳を募集するで川柳ハ
イ支部ワイロウ社ではハワイに於

ける川柳普及奨励のため、右の應
募作品中の優秀句三才に賞品を贈
ることとし全島へ呼びかけた。▼食
瀧南北氏古稀祝賀句会が十二月廿四
日午前十時から上六の生長の家会
館で開演された。▼夕刊山陽の刊
刊記念川柳選第一席、賞金の千
円は三原市の齊藤正一氏の「用
心は妻にも記憶して貰ひ」で選者
は麻生路郎氏。引続き第二回
が募集されている。▼美作川
柳同好会では一月三十日午後
小林白鳳居で新春句会開演。▼川
柳岡山支部では山陽新聞後援の下
に日展協賛新春川柳大会を一月
十五日天淵屋で開演した。▼長崎川
柳社では一月廿二日山口十起居で
新年句会を開演。▼「私」は一月一
日終刊号を出したが亀井、河野
氏は二人誌として「人間派」を刊
行すると。▼河原魚行氏(戸田市)
が旧十二月に永眠された。謹悼
▼松原周太郎氏は旧冬于石莊病院を
退院、大阪市東成区東小橋南の町
一丁目六八米田秀子氏へ移られ
た。▼松野えい氏は佐賀縣西松浦
郡松浦村山形金石原原前へ轉居
大島壽明氏(熊本市)は還暦を迎
えられ「希望まだ捨てず六十一の
春」を寄せられた。▼本田水鏡氏
(愛媛縣)が十二月三日永眠され
た。謹悼。▼三宅五郎氏は東京都北
区稻付町四ノ五六四に轉居

不朽洞會から

▼布施筑川博士は阪大病院長の任
期が一月末で満了とのこと、重責
を果たされたことをお祝ひ申し上げ
る。▼中島生々庵博士夫妻は十二
月廿九日夜、路郎師を北極星北京
料理に招いて忘年会をされた。▼村松
夢裡氏(大阪市)は日本樂器製造
株式会社大阪支店長を十二月に辞

任、三十七年の勤務の同社を田淵
退社された。▼佐野ト占氏(八代市)
は一月一日八代を發ち二日福岡赤
穂へ着き七日、川柳本社を訪問さ
した。が初句会当日なので全員不
在で面会出来ず九日午前再び本
社を訪れ、路郎主幹と敬談、午後
主幹の案内で宵夜に参拜、川柳難
波連絡所に立寄り、共に百貨店
等を視察され夕刻辭去された。▼
浜田久米雄氏(岡山縣)は一月十二
日に山陰の玉造温泉長樂から「今
年こそは今年こそはと湯につかり
の句を寄せられた。▼菊沢小松園
(大阪市)は一月七日片山津矢田屋
から「旅こゝろ雪を両手で受けて
見る」の句を寄せられた。

新會員紹介

- 田代 尋 四氏(兵庫縣) 正
- 家 沢 齊 花氏(同) 正
- 黄 瀬 美 秋氏(滋賀縣) 正
- 藤 本 潤 年氏(岡山縣) 正
- 西 川 如 川氏(熊本縣) 正
- ト占氏推薦
- 無 鬼氏推薦
- 豆 秋氏推薦
- 久米雄氏推薦
- ト占氏推薦

黒硝子

高橋化粧品客店には断然！
ヤマギンの……
山銀株式會社
大阪市東區東區
西通一丁目四番
電話 南 四四七番

本社忘年川柳會

十二月三日午後五時三〇分から恒例によつて賑やかな忘年句会を開催した。余興には里十九、鮎美、竹莊氏等の歌舞伎放送劇が熱演された。忘年句会の空氣を一層和やかにした。閉会后、同所で不朽洞会の忘年宴が催され歡を盡して散会した。

(幹事)

出席者 路郎・鮎美・竹莊・里十九・豆
秋・草々・春柳・淡舟・正則・昌木子
白泥・万樂・芦穂・梅里・紫香・香林
正司・小雅子・文蝶・愛論・春草・島
莊・沒食子・季贊・文雄・翻骨・夏六
迷宮・敏夫・好郎・勢三・旅風・春木
笛生・生々庵・さばち・白柳子・琴
・曹丹子・水客・陶王・默立・司郎
梨光・白香・瓜平・朝夫・霞乃・梨里

兼題「集金」 西 尾 栗 選

集金に氣をくさらして映画館
集金に無沙汰の顔を見せる春
掛取の來ない年末淋し過ぎ
集金ヘルをけし年未だ門構え
入り込んだ話集金聞かされる
判取帖商賣敵の名をみつめ
集金はうっかり同情してしまい
まとった金は親爺が取りに来る
集金のお女將が行く社長室
重役も集金に長い十二月
集金が故郷の訛りを聞きとがめ
集金が身につまされる子沢山

修 三 春 草 司 郎 一 郎 没 食 子 翠 光 同 梅 里 丹 井 竹 田 水 客 生 々 座

兼題「隠し藝」 正本

かつほれを習い、重役第一課
隠し藝出して、ももうて寝てしまひ
かくし藝笑ひ、上戸の多いこと
隠し藝ゆつくり吞んで席をたち
振袖がほしいあな、たのかくし藝
如さんを同僚れさせた隠し藝

隠し藝過去に飽れたか泣上戸
 隠し藝女の赤いもの借りて
 隠し藝用意してゐるのが当り
 隠し藝演るには足らぬ酒の量
 隠し藝やつぱりうまい営業部
 威儀正し仲人としてのかくし藝
 隠し藝若さを妓すけてやり
 隠し藝うまく何時まで平社員
 隠し藝自慢の羽織裏返す
 火くきききききききききき

三味線につりだされてくるかくし藝
猛烈な拍手幹事のかくし藝
かくし藝無口な男見なをされ
三味線の糸切れたまゝ隠し藝
役員の腕章のまゝ隠し藝
隠し藝お國なまりをばいからず
すばぬけてうまい無口のかくし
三味線もとりりとする隠し藝
隠し藝へ向いてゐるのは藝妓だ
三味線に注文つけてる隠し藝
かくし藝酩酊をした声でなぐ
廊下から用意してくるかくし藝
隠し藝もと神主と云う過去あり

客選

春 紫 草 小 白 千
集 香 々 雅 柳 舟

正豆鮎昌文生青一翠竹
司秋美子雄庵子郎光莊

水同白梨瓜烏鮎獸同葉同芦同竹
客柳子平莊美立光穗肅

クリスマス雨だれの音もワルツめき
白香

クリスマス妻の鱈を焼く匂ひ
親のない子がもう寝てるクリスマス
クリスマスせめて今宵は酔いませう
越冬資金もめてる中をスリスマス
クリスマス子供の夢はつづくなり
クリスマスこのウインドも雪が降り
迷宮

クリスマスマスカード(夢を書きつづり
七面鳥クリスマスまでの声で鳴き
パイプは流まきクリスマス踊る
手内職はクリスマスの銀の星
クリスマスナイとホップで送りだし
キラキラタロウの氣に入ろうな雪にり
今年も皆なし父の燭はねクリスマス

青丹子
勢三
栗穂
白泥
鮎魚
生々
草集
生々

コッブ酒 あてもいらずにぐっさ飲み
あんこの顔にリ、シイコッブ酒
明日も又うんと働けりコッブ酒
一日の疲れを慰やすコッブ酒
コッブ酒 父若き日の氣咄吐く
且那より二母が強いコッブ酒
うら淋しこれで仕舞のコッブ酒
コッブ酒 明日の暮しへ目をつくり
コッブ酒 カツパの味を知つたや
コッブ酒 酒なにやら一人云ふてある
菊正が十銭で呑めたコッブ酒
コッブ酒 もう一杯と酔ふて居す
ややくそで呑んで様なコッブ酒

相模崎「コッブ酒」

鳥 莊
香 林
勢 三
默 立
き ば
は ち
竹 莊
文 雄
翠 平
白 泥
紫 香
梅 里
淡 典
小 雅子

十二月十七日夜 於 王子神社

ボーナス・ふぐ・物議り・福引
もうつい停年と言ふボーナス日 春
ボーナス日父が昔の流行歌 柳
全計にきけばボーナスごころかい 豆
ボーナスをたのしく使ふ共稼ぎ 秋
葉光

封をしたまへて心ブラする賞與
ポーナスの計算をするペンを借り
ポーナスを何時くくれるやら年の暮
ポーナスの日なり社宅は惣て買ひ
ストーへ帰るポーナスさぐり行き
郵便のようにポーナスを置いて行き
ポーナスへ妻も野心をもつてゐた
これしめポーナスと云ふ若なり
浮き／＼するにポーナス少な過ぎ

水 柳 古 春 落 万 瓜 水 路 文
都 方 柳 平 樂 郎 櫻

阪田膽寫版

大阪北區芝田町五二

株式會社 阪田商會

電話 編九三六

番九三六一 島福 話電

十二月十七日夜 於王子神社

ボ
ー
ナ
ス
・
ふ
ぐ
・
物
議
り
・
福
引

ふぐ汁へ外交員は話し出し
名代のみ提灯が客を待ち
水族館ふぐはまともにもう向き
たまきれてから病うつみ河豚の味
河豚造る板場自直のある構え
木枯しに飛び込ん来るふぐの客
一箸はこわくたつる河豚の味
提灯になるとは河豚も知らん
このさしみ河豚の姿の色でなし
叱つてる父もこつり河豚を食べ
看板の河豚が嬉しい細のれん
ちり鍋の女は河豚をよけて食ひ
ふぐ料理もう拒ばぬい仲になり
てつちりへ冷い風の窓を閉め
みぞれとして行燈を入る河豚料理
ふぐ汁に競馬の愚痴がまだつき
ひれ酒へ泊つて帯れと雪が降る
ふぐ造り出産あるのもうれし
物議りが中途半端なことを云ひ
物議りの廻轉椅子がまた廻り
物議りは寝床をひいた出掛け
青白い顔で物議りそり返り
生字引と云はれ課長にもならず
物議りはちと怪しいもの話し
物議りにきくと五十年度の寒さ
町内りの物議り寄附を集めに来
物議りの外交が来て腰をすえ
ラチオ新聞みんのこる物議り屋
物議りが次席課長が五度かわり
物議りへ今日はやい場所き
物議りもやつぱり金に詰つて居
物議りと呼ばれ長屋で職もなく
物議りは夜の店をやも立止り
案の定物議りの陸寄つて来る
税務署へ来て物議りが此つてあ
ものしりや餅に余念ない日向
物議りのそもくから長くなり
物議りを訪へば薬をせんで居
いつきても物議り墨をすつてあ
ともかくも甚平術はんこきに行き
物議りが昨日の事忘れて居
物議りはにつこり笑ひださる
物議りにいつしかさる長患ひ

鮎美 柳方 古平 落平 種美 野介 同和 笑里 正都 水司 落都 豆秋 万秋 豆秋 萬秋 志津 万樂 萬樂 種美 豆秋 沐天 野介 路郎 正司 落都 亞鈍 萬秋 豆秋 萬秋 文秋 落都 水司 正都 里九 笑和 同和 野介 種美 落平 古平 鮎美 柳方

からくと廻せば五等飛んで出る
福引の後で財布すられて居
一等の心配もして来る福引場
今日あたり特賞が出る福引場
福引は一等様と書いては引
福引に懲の様なのがよく引
巡廻い連れを信じて引いてみる
飾るだけかざり福引ひまなこ
福引にあの手この手のピラの色
大当り住所姓名貼り出され
福引へあと二十回無駄に買ひ
福引で悪運強いものときれ
福引におやどさき引きに行き
福引の補助券隣からもらひ
福引の一等マイクは呼びつづけ
ネンゴの兄に福引の懲があり
福引を賑かに来る東西屋
ほんまにあたりまつかと福引所
里十九

東京支部句會 (東京都)
十一月十九日 於島野寮
川村好郎 報

象・締切・自惚れ・アルバイト・
風呂・ホスター
象が来て少しやいてる猿キリン
象の背に乗ってターキーとよるへ
インデヤ嬢フツ密林を恋し直し
象に乗る夢を見てるか子の笑顔
象を見て娘盛りにある悲哀
締切日迫り作家のひげは延び
締切しの頭へ落ちるホームラン
締切に間に合つてればと強氣が
締切りの後から顔ですべり込み
締切りをまたして特等飛んで来る
締切りのドアを肩で入るホス
ほめられてその氣にもなる立候補
若様の嫁になる氣の身をまかせ
きりようより衣裳を脱ぎと知らず
自惚れが今日も女給に取りまかれ
キヤツは激さ言ふ自分か減った
自惚れの自己をみつめた待ちぼうけ
自惚れへ御苦勞さんと鐘一つ
同不千好登不山雨好東二

たしなみにしては鏡に向ひすぎ
女事務アルバイトに行く衣裳替
アルバイトするさは知らぬ郷里の母
成績と反比例するアルバイト
アルバイト何時学校へ行くのや
アルバイト社会はかくもせがら
女客に少しして居るアルバイト
アルバイトきれいなそが言ふ言ふ
銭湯の鏡にうつるあばら骨
ズロースをそつとかくして貰ひ風呂
風呂で先づテストとみるのさ自慢
春を流す力へ父は嬉しう
木枯しに吹かれて風呂に走る影
銭湯の乳房に歳は争へず
はがせどもはがせども又赤いピラ
マツチも刷りホスターを出し閉店
税務署がホスターを出し世の変り
ホスターで破れた頃に客がつき
ホスターでは麗人ばかりであつた筈
納税のホスターなどは目もくらやみ

川美作支部句會 (岡山縣)
十一月五日 於弓削町役場
藤本満年 報

運命・娟・予言・窓・上衣・口
運命と云うてしまつて割り切れず
家運だと云うて毎日呑みあかし
映画では恋の列車はすれ違ひ
落下傘海へ流れる風になり
娟びる事忘れた様な許嫁
成金へ意地なぞ捨てて娟びようか
知性なき女の媚態さげすまれ
度がすぎた娟へ浮氣を感すかれ
人前をふと忘れ目が媚ていた
欠伸ふと女の娟に突き當り
パンくふと娟に酔うのも旅のこと
晩年は命が出来ると予言され
何事もなくて予言の年は暮れ
予言者を笑うて少し不安なり
予言者へ言訳ほごの微震なり
窓硝子割れてゲームセツトなり
銭湯のかえり上衣をさけて居り
十九平

血洗を徳利の様に振る白衣
手を振るは手を振る列車通過
ない袖も振れと追徴後が来る
振りつけがどうのうと酔うて居る
火加減を教へて妻は里へ行き
消防署水利が悪い申し訳
保険屋は明日にも焼ける様云ひ
川柳雑誌
布哇支部
ウイロー社句會 (ハワイ)
十一月 於商工会議所社交室
郵便
昇給へ母の郵便意見めき 亭駒

品質優良
タチカワペン先
TACHIKAWA PEN
大阪東区豊後町四八
立川商事株式会社
タチカワペン
タチカワセム
タチカワ画紙

郵便ですげなく無心ことわられ
郵便屋明日公休の足で来る
郵便を小供と犬が門で待ち
メルマン外人だけれさうかし
小包がそのまゝ居く世となつた
小包を済して二人ホットする
郵便爲替先祖の前で拜まれる
人生へ郵便物はついて来る
無心催促ラブレター郵便局は忙し
近ければ餅を送るゝ母の文
今日また素通りなりや郵便車
荷造つて局へは女房送るなり
エヤメルインクの色の生々し
何百口の切手で空から無心狀
軍用鳩郵便よりも早く着き
ギフトバーセル一つに顔が浮き
郵便の窓で日本語少しまぜ
眞夏の陽郵便箱へ照り返し

岡山支部句會 (岡山)

十月廿二日 於岡山第五鉄道寮
藥局・おしやべり・花束・手帖・ス
タイル・一升瓶・電柱・瓜びき

藥局は顔だけ見える窓をあけ
食前と食後藥局順に出し
藥局へ医者が呼ばれた子の病氣
避妊藥とホルモンが同じ棚にあり
言ひにくく藥を買ふふもふしあはせ
藥局は眞顔で嘘を聞いてくれ
藥局は水も値段の中に入れ
藥局の窓に言葉もあらたまり
退院の祝藥局へも顔を出し
おしやべりを上手に聞いてたおき
おしやべりのこゝろは嘘だいておき
おしやべりが出来る高きの垣根越し
おしやべりがつい終点に来てはい
おしやべりの賑やか過ぎる洗面所
おしやべりは時計が鳴つたさやめ
花束を次のえ廻す葬式屋
渡す手が触れて花束ちとふるへ
花束を捧げる役は市長の娘
花束を贈つて手こたへ待つ氣なり

花束を片手で受けるあつけなさ
花束えシーツの白さはね返り
花束を肩の廣さで受けるなり
表から裏から手帖つけ始め
脱税が手帳の上でばれちまい
手帖から俄然捜査課活氣づき
取りあへず手帖へサインして貰い
警察の兎角手帖を出したがり
相棒にのぞき込まれている手帳
手帖から君の人格うたがわれ
いかめしい手帳中味は流行歌
うつかかりと手帖の隅に残る恋
手帖から辞世の一句見出され
服だけ スタイルアツクのまゝ
スタイルは一年前の娘ではなし
着る間より縫う間が長いニールツク
スタイルが良くてモデルに成り下り
米を搗く一升瓶へ肩が濡り
掃り途一升瓶は下戸がさげ
一升瓶底へちよつびり配給酒
一升瓶づらり花嫁来る日なり
電柱へつばめは旅の息を入れ
電柱のビラへ太陽がまだ残り
瓜びきを時折やつてもとが知れ

篠山支部句會 (兵庫縣)

十一月十二日 於配電局會議室
鼻唄・靴

朝からの鼻唄昨夜もたらし
憂さ晴らしと知らず鼻唄義まれ
この靴を磨いて呉れさと言ひ出せ
新品の靴で疊を歩いてみ
無理をした靴それなのに雨となり
南方の靴が一時の身を救ひ
長靴をはいて閑屋の型となり
側つて居るベビーに靴を買つてや
足もとを見て靴磨き声がなし

川竹支部句會 (廣島縣)

十一月十二日 於葉留路居
猫・酒・声・闇米・火鉢

晝寝した子供の横へ猫も寝る
猫背の方が社長ですと教へられ
猫なればこそ貴婦人のひざにのり
配給の酒いゝ所へ来たと言ふ
もつかつた寝酒女房も少し受け
カストリはカストリだの氣煩い
酒機嫌れだりこない品を買ひ
酒だけ親父ゆづりて才子肌
蔭の声ですと無氣味な声を出し
ヨウ／＼と声がかゝつて下戸唄ひ
澄み切つた秋へどこかよいさ
闇米へ妻は月給の高へふれ
闇米へ検事も痛い所つかれ
たし米を買ふのに困る詰をかけ
餅を焼く火鉢待てない顔が寄り
向き合つた火鉢名案湧いて来ず
初対面火鉢へ遠くかしこまり

川姫路支部句會 (姫路市)

十二月五日 於樹市居
毛糸・クリスマス・七味・マフラー・手相

毛糸玉をのりていつた椅子の脚
店先の毛糸を見れば寒くなり
毛糸買う妻れざることわざ
おしやべりもつて手も休まなく
屑毛糸母が工夫の靴カバー
毛糸にも二十歳の年の氣はもつれ
どこからか毛糸を出して編のはじ
同郷のよしみで毛糸買はされる
編みかけの毛糸をもつてべり来
クリスマスの子のプレゼント
クリスマスマフラーはダンスなり
子の夢が叶へてやれクリスマス
七味のきいたうごんも嬉し新家庭
七味買う男の姿世帯ごみ
流行が追へぬマフラーのあわれなり
マフラーの汚れに春の風が吹き
ボス或る日白いマフラーして出かけ
話題豊富手相もちよつと見るさうな

身をおとす女手相を見せてゐる 樹市
川出雲支部句會 (出雲市)
十一月二十六日 於商工會議所
尼縁之助報
平和
ノーベル賞平和日本の第一歩 へとち
何の平和心のなごみ絶えてなき
ともかくも朝の間に含み米を買
母の手を握れば母の掌の冷えて
平和だと思ふぞ右と左あり
湯かげんは妻の氣をあらわして
はる／＼と帰つて平和の味を知り
米びつに心のおけぬ暮しなり
日の丸句會 (鳥取市)
十一月二十一日 於日の丸自動車工場
河村日濤子報
持つ
ハンドルを持てばおきた人てなし
親切で持つた荷物が重過ぎた
十万の金嵩妻に持たしてみ
菓子一つ犬に藝なぞしひるまじ
女房が花活けるなぞ思はざる
給料日です玉子とじ玉子とじ
おうごんを食つて夜業のけりをつけ

母袋未知庵著

川柳信濃國

信濃へあこがれを持つ人は多
いが、ホントの信濃を知つて
る人は少ない。先づ本書によ
つて江戸文学から、信濃を探
れ!

B6 100頁 150円 1500円

發行所 しなの川柳社
松本市大名町七二

趣味と教養の殿堂

松坂文化クラブ

會員募集



松坂屋

大阪日本橋
電一七二番

詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ

項目
華道(小原流・末生流)
茶道(表千家流・宗廟)
洋裁・書道・日本画
華曲・舞楽
手鏡・古典・新舞踊
長唄・小唄・謡曲
服飾デザイン

シマズに

ヨクキク

大目薬

結膜炎
トラホーム
つかれ目



至天堂製薬

酒販用紙コップ
アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切

大阪市阿倍野区晴明通一丁目

特殊紙器工業株式會社
フタバカツ株式会社

昭天下茶屋

五五八〇
三三八〇
一三二番



美しい店
買いよい店



アベノ・上六
近鉄
大 阪

編輯室にて

▼新春号が、各地へ歳末や元旦早々に届いたので大変な人気だった。今後一層の御べんたつと御後援をお願いする。▼各地の柳人各位から、社宛に又私宛に年玉つきの賀状を沢山いただきましたが、こちらは賀状印刷の寸暇もなく春を迎えたので、誌上御挨拶でおゆるしを願っておく。▼本号の表紙はおなじみの種瓜平画伯の力作で川柳雑誌社難波連絡所の意外風景である。▼富士野鞍馬氏の四世川柳「眠亭丸」の稿は本号で完結した。▼戸田古方氏の「川柳建立」は川柳啓蒙所論の第四稿である。あと一篇で完結するので総合して読破すれば氏の所論が徹底するので氏としても満足であるうと思う。▼安川久留美氏の三句評は明徹な批評で後進作家を裨益する事と思う。▼前田伍健氏の放逐打明け話は春らしい朗かさを感ずる記事である。▼拙稿「続川柳講座」を待望される方が多いので、久しぶりに執筆した毎号掲載したのであるが雑用が多く例の採集にゆつくり時間がないのでつい「未掲載になるのである。殊に年末廿日から又々臥床したので原稿執筆の予定がスツカリ外れた。いつもの疲れなので、心配はないが、もう少し思索時間や執筆時間が欲しいと思う。▼本年は「川柳倍加運動」をやるのでぜひ「御協力」を乞う。



Made in Occupied Japan

(戦時禁)

川柳雑誌

第一五巻
第二号

牛ヶ年概算
一ヶ年概算
昭和廿五年 二月 一日発行

昭和廿五年 二月 一日発行

昭和廿五年 二月 一日発行

昭和廿五年 二月 一日発行

昭和廿五年 二月 一日発行

募 集

課題吟募集

土産(十句) 橋本緑雨選
(三月五日締切)

煙草(十句) 弘津柳慶選
(四月五日締切)

毎号募集

近作柳樹雑誌廿句 麻生路郎選

川柳塔(雑詠) 麻生路郎選

文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。

▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

R列5号 毎月一回一日発行

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円

金三〇円